

佐々木

君五郎

— 植林を進め、  
洪水を防ぐ —

君五郎（幼名保吉）は明治六（一八七三）年、古川の呉服商の家に生まれました。保吉は子どものころ、江合川の堤防が切れ、田畑や民家が大きな被害を受ける様子を目にしました。そのすさまじさは心に強く焼きつけられ、どうにかならないかと考えるようになりました。そして、堤防を高くするだけではなく、江合川の上流の山に木を植えれば木々の根が雨水を蓄える。そうなれば、水が一気に川に流れこまないようになり、洪水を防ぐことができるのではないかと考えるようになり、保吉がこのように考えるようになったのは、山地を開墾して果樹園を作った父の影響も少なからずあったようです。



佐々木 君五郎

保吉は、十六歳のころから家の仕事を手伝い、江合川の上流の町や村へ呉服の行商に出かけていました。十八歳になった保吉はいつものように番頭を連れ、鬼首へ行商に行きました。その晩は近くの農家に泊めてもらいました。夕食後、その家の主人とよもやま話をしているときに、山が売りに出されているから買わないかという思いがけない話を持ちかけられました。その日の売上金八十数円を持っていた保吉はすぐにその話にとびつき、こう言いました。

「よし買おう。ところで、いくらで売りに出ているんだい。」

今度は主人がおどろきながら、

「ほ、本気かい。何でも八十円だそうだが。」

呉服商：  
衣類などを売る  
商売。

行商：  
直接、家々をまわ  
り、食品や生活用  
品などを売ること。  
番頭：  
商店のやとわれて  
いる人の一番上の  
人。

よもやま話：  
世間話。

当時の八十円：  
現在の百六十万円  
ぐらいの価値。

と言いました。話はほとんど拍子に進み、売り主を訪ねた保吉はその晩のうちに山を手に入れました。

古川の家へもどり、集金したお金で山を買ったことを報告すると、

「なにな、売上金で山を買っただと。相談もなく勝手なことを……。どうせ、だまされたんだろう。」

と、父親は大声でどなりました。保吉は自分の考えを熱心に語りましたが、父親には聞き入れてもらえず、ついには勘当を言い渡されました。保吉はがっくりと肩を落としました。目の前で腕を組んでそっぽを向いている父親におじぎをして、うつむいたまま家を出て行きました。

勘当された保吉は、東京の時計屋で働くことになりました。しかし、保吉は一時も自分の思いを忘れることはありませんでした。ひまさえあれば林業に関する本を読みふけていました。ちょうどそのころ、東京大学の本多静六博士の「治水済民」の話を聞く機会を得ました。講演会に

参加した保吉は、じっと博士の話に聞き入りました。木を切りすぎたり焼畑農業を行ったりして、山が荒れてしまった地域がある。山が荒れると土の保水力が弱まり、洪水などの大災害が起こる。山林を守り木を育てることが川を治めることにつながり、水害から人々を救う方法になるという、本多博士の話は、保吉のこれまでの考えを強く後押しするものになりました。

保吉は目をかがやかせ、自分が進むべきこれからの道について考えました。

東京での生活が六か月をむかえ、十九歳になったころ、母の説得や家の商売が人手不足になったことを理由に勘当は解かれました。このとき、保吉は名を



勘当…  
親の意にそぐわない言動に対してしかられ、親子の縁を切ること。

「治水済民」…  
植林などをして山を整えることで河川の氾濫を防ぎ、洪水の害から人々を救うこと。

焼畑…  
草地や林などで、雑草・雑木を焼き、その焼跡にそばやひえ、大豆などを蒔きつける畑。

君五郎と改めました。帰郷後は呉服商をやめて時計屋を開業し、そのもうけたお金で山林を少しずつ買い集めました。

君五郎が二十一歳のとき、時計屋をやめなければならなくなりました。父親が友人の借金の保証人となったことから、友人に代わって多額の借金を返さなければならなくなったからです。

それを境に、君五郎は自ら山に向き本格的に植林を始めました。二、三人をやとい、苗木を植える作業に集中し、気がつくとい日が暮れていることもありました。あるとき、苗木を植えること自体を理解できないやとい人が、

「こんな木を植えるんですか。いったい、何のために。」

と、納得のいかない表情でたずねたことがありました。しかし、君五郎には植林することの大切さを説明する余裕はなく、早く植えたい一心から、「いいから、だまっておれの言う通りに植えろ。」

と、強い口調で命じたこともありました。そのため、

「佐々木屋の若だんなは頭が変になった。山に木を植えている。」

と村人のうわさになりました。また、わざわざ植林した山を見物に来る者もいたりしました。そのころ、自然に木が育っている山に木を植えるという考えは、受け入れられていなかったのです。ただ一人の理解者は父親だけでした。以前、勘当まで言い渡した父親でしたが、何があっても変わることはない君五郎の強い思いを知り、心から応援するようになっていました。このことが、君五郎の大きな支えになりました。

その後も、植えた苗木に肥料をやっただけでうわさになり、温泉の湯治客までがこの山を見に来ることもありました。君五郎はそんなことなどまったく気にせず、山が売りに出れば買い、杉の苗木を植え続



湯治客…  
温泉宿に宿泊など  
にきた客。

けました。植林が進めば進むほど苦難も増えました。多くの人をやとつためには、これまで以上にお金が必要です。家賃や小作料だけの収入では、どこにも足りません。ときには家財を差し押さえられることもありましたが、君五郎の住んでいた古川と植林した鬼首などへの行き来にも苦勞しました。今なら車で一時間半の道のりですが、当時は行くだけで半日かかりました。さらに植林をすると二泊三日の行程になることもありましたが、苗木を背負っての山越えの苦しさは、想像を絶するものがありました。それでも、君五郎は鬼首や鳴子、川渡、中山平など江合川の上流域に次々に山を買って求めました。

君五郎は植えた木の様子を確かめるために、久しぶりに山に登ると、眼下に広がる江合川が見えました。おだやかに流れる江合川を見て、君五郎は目を細めました。

君五郎は生涯、初心をつらぬき、杉などの針葉樹約二百万本を植えて山を守りました。森林の大切さを子どもたちに教え、「学校植林の育ての親」とも呼ばれるようになりました。昭和二十八（一九五三）年、財団法人「佐々君治山報恩会」を設立し、所有する山林五百二十二ヘクタールと七千五百立方メートルの美林のすべてを、この会へ寄付しました。君五郎は昭和四十（一九六五）年に九十二歳でこの世を去りましたが、その志は、今も財団の充実と発展のために受けつがれています。

#### 佐々木 君五郎

佐々木 君五郎は、明治六（一八七三）年に、現在の大崎市古川の呉服商の家に生まれた。江合川の洪水を防ぐため、植林による治水の必要性を説き続けた。資金難や作業の困難さを乗り越え、「自分がこの世に生を受けたのは治山治水のため」という信念で事業に取り組んだ。そして、江合川上流におよそ二百万本の杉を植林した。

小作料…

地主から土地を借りて農作物などを育てた人（小作人）が、土地を借りた分について払うお金など。

家財…

家具などの家にある財産。

針葉樹…

杉や松など、一年中、葉が緑色の木。

美林…

美しい林。ここでは、背丈が高く、つばな木々が生えている林。